

## 第二章 「古代史の論争」…東大と京大の学派

日本の古代史で史学会や考古学会の論争点は、中国の歴史書「三国志」の「魏志倭人伝」に伝えられる倭人Ⅱ卑弥呼の倭国Ⅱ邪馬台国は何処にあつたか…この論争は古くは、江戸時代、さらに明治から大正時代には京大と東大が、大和か九州か、で論争になっていた。ここでは、わかりやすい解説・記述だと私が感じている、武光誠（注・東大派）「邪馬台国と大和朝廷」（平凡社新書）の内容に依拠しつつ要点をまとめる。

古代史を調査・研究するにあたって、基本的な知識を確認しておきたい。史学には「文献学」と「考古学」がある。武光先生によれば次のように解説している。…

文献学の時代区分は歴史時代、原史時代、先史時代の区分がある。ある民族の最初の歴史書つくられた後の時代が歴史時代である。そして、その歴史書の記述によってほぼ史実を確定しうる時代が原史時代、歴史書を手がかりに歴史を復元できない時代を先史時代という。

考古学では、一般的な時代区分は旧石器時代、新石器時代、青銅器時代、鉄器時代の区分である。…縄文時代

は新石器時代に相当する。…日本には青銅器時代がなく、弥生時代は鉄器時代とされる。水稲耕作とともに、青銅器と鉄器がほぼ同時に伝わった。

古代史の論争の核心について、武光先生は次のように解説している。…

邪馬台国論争は長期にわたって「大和か九州か」という問題を中心に行われてきた。しかし、今日では邪馬台国がどちらかの判断は、日本古代史のとらえ方にかかわる重大な問題になっている。

邪馬台国大和説をとれば、天皇家の祖先に当たる大和朝廷の大王（注・卑弥呼）が二世紀末（注・西暦一九〇年頃）にすでに西日本の統一を終えていたとみる。

一方、邪馬台国九州説に立てば三世紀半ば（注・二五〇年頃）は、北九州、大和など多くの政権が並び立つ状況であつたことになる。

そして、四世紀初め（注・三〇〇年頃）にようやく大和朝廷の征服活動が始められたと考えられる。つまり自分が大和説につくか九州説につくか決めない限り、日本古代史の全体像を把握できない。

## ■江戸時代の邪馬台国の所在地論争

武光先生によれば次のように解説している。：

江戸時代中期に、人間中心主義の学問が芽生えたのだその一つは漢学(朱子学)の流れをひくもので、もう一つは国学という新たな日本固有の思考である。前者は貝原益軒、新井白石、三浦梅園らに代表され、後者は賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤らを中心とする。

両者は江戸時代に相反する立場をとった。漢学者の多くは武家の支配を肯定する姿勢を示した。幕府政治の行きづまりから生まれた国学は、天皇支配の再現を求める尊王論に結びついた。

一般的には新井白石は、魏志倭人伝の読みから、邪馬台国大和説をとったと、日本書紀の読みから、神功皇后が卑弥呼である、と考えていた。白石の説は、何の説明もなしに、倭人伝の所在地の方角を「南を東に読みかえる」という欠点をもっていたことになる。白石は晩年になって九州説に転向した。

国学者の本居宣長は、日本の古代史は「古事記」などによって復元すべきであるとする立場をとり、中国の史

書を頭から否定した。つまり新井白石と正反対の考えにたつたのだ、かれは、敬愛する皇室が中国に朝貢したと認めたくなかった。彼は「筑紫の南方で勢力を持っていた熊襲(くまそ)などのたぐいが、…女王(神功皇后)の…御使と偽ってつかわしたる使いである」。このような考えを「偽僭(ぎせん)説」という。

さらに宣長は、魏志倭人伝の行程記事に鋭い疑いを投げかけた。そして、古事記や日本書紀を盲信する皇国史観へと行き着く。本居宣長以降明治時代末まで邪馬台国研究の目立った進展はみられない。

(以下…大野・私見)

これらの論争の根拠は中国の「魏志倭人伝」や日本の「古事記・日本書紀」など、文献史学(史料の解釈)の範囲から脱していない(江戸時代には現在の考古学はなかった)。私には「そうだったのか」の印象だけだ。

ただ、本居宣長の「偽僭(ぎせん)説」については、東大派の九州説に結びつけて、ありそうな話だとの印象を受ける。大和のヤマト王権と並立しながら、九州の邪馬台国・卑弥呼が「倭国」を名乗って中国と交渉した、との解釈ができそうだと思う。

## ■東大と京大の学派の所在地論争

武光先生によれば次のように解説している。：

明治維新をきっかけに政府の指導のもとに、ドイツ流の実証主義史学が文献史学の主流を占めるようになった。中心人物の一人、「星野恒」は、明治二五年発表の「日本国号考」のなかで、卑弥呼を西国の一酋長としたうえで、邪馬台国を筑後国山門郡においたうえで、邪馬台国は大和朝廷に滅ぼされたというのだ。

そのころ官学アカデミズムでは、「黒板勝美」らの日本古文書学が、体系化されていた。黒板勝美らの手になる「国史大系」は今日でも日本史研究の基礎的文献として重んじられている。

明治四三年は、邪馬台国研究のうえで画期的な年になった。邪馬台国大和説を唱えた京都帝国大学教授の「内藤虎次郎」の「卑弥呼考」と、九州説を唱えた東京帝国大学教授の「白鳥庫吉」の「倭女王卑弥呼考」がほぼ同時に発表された。文化系の学問の活性化が背景にある。

一般的には、京都大学の和説は内藤虎次郎に始まり、東京大学の九州説は白鳥庫吉に始まるといわれている。しかし、正確ではない。先に述べたように、東京大学の

星野恒はすでに九州説を唱えていた。「久米邦武」も明治四十年の「日本古代史」で星野説を受け継いでいる。

だが、そういった東京大学の学者は「魏志倭人伝」の距離、日数、方向について満足のいく説明を行っていなかった。史料に忠実に従えば、邪馬台国は九州をつきぬけた南の海上にいつてしまう。それゆえ、合理的な解釈を加えて、邪馬台国を九州においた白鳥庫吉の説が高く評価されるのだ。

一方の内藤虎次郎は、新たな史料解釈で大和説に目をさせたことになる。内藤虎次郎は「魏志倭人伝」の方向の書き方が違っているとみた。…（江戸時代の和説の）新井白石は説明なしに南を東に変更した。しかし、内藤虎次郎の説は、それを「魏志倭人伝」の誤記とした面で、より大和説の立場を明らかにしたと評価できる。

（以下…大野・私見）

明治から大正時代の史学は中国の文献「魏志倭人伝」の解釈で、このような「学派」に分かれている。これにわが国の文献「日本書紀・古事記」が加わり、考古学の現在の知見が加わると、どのような展開になるのか。

## ■文献学の「紀・記」批判、考古学の台頭

武光先生によれば、次のように解説している。：

大正時代に入ると郷土史研究が盛んになった。さらに津田左右吉の記紀(注・日本書紀と古事記)批判や野呂栄太郎らのマルクス主義史学も現れた。：しかし両者は、皇国史観と合わなかったために、昭和六年(一九三二)の満州事変の開始以来、弾圧を受けることになる。

津田左右吉は、大正二年に「神代史の新しい研究」を発表し、「古事記」や「日本書紀」の記事の多くは、後世の朝廷で創作されたものであると指摘した。そして大正八年には「古事記及び日本書紀の新研究」を出してそれぞれの史料批判を推し進めた。津田の説に従えば、卑弥呼に関わる事件や人物を「古事記」、「日本書紀」の古い時代の記述に結びつけてきた邪馬台国大和説は、よりどころを失う。

津田左右吉は「神代史の新しい研究」で邪馬台国九州説をとつたといわれる。「魏志倭人伝」の時代には九州地方には小君主が多くおり、そのうち「皇室が筑紫から移って新たに都を奠(さだ)めた」と記しているからであ

る。津田左右吉は戦後の「邪馬台国の位置について」の論文のなかで、：卑弥呼の時代に当たる崇神朝、垂仁朝に女王がみられないことは、大和説の弱点であると述べる。そこから、かれは邪馬台国は筑後国山門郡にするのがよいと説く。九州説としては妥当なものである。

昭和二十年代半ば以降の文献史学の立場からの邪馬台国研究に目新しいものは少ない。これ以降は考古学上の新発見が邪馬台国研究の目玉になっていく。昭和三十年代に入ると、文献史学の研究者も考古学の成果を学んだうえに自説を組み立てるようになっていった。昭和二十年代後半から文献史学以外の分野の学者による邪馬台国論がいくつか発表されるようになった。考古学者の小林行雄(注・京都大学)の同範鏡理論は、その代表的なものである。彼の出現によって邪馬台国研究の流れが大きく変わり、考古資料と文献とを併せみたうえで、邪馬台国の位置を考える今日的な邪馬台国研究が確立した。

(以下…大野・追記)

ここからは東大・京大をはじめとして、古代史研究が盛んな大学の研究者とその学説を、私なりに選別して紹介、解説していきたい。

■日本の大学別・古代史研究の学説

【東京大学・文献史学・考古学の学説】

●星野 恒(ほしの ひさし)・一八三九年生れ

東京帝国大学文科大学教授・文学博士

明治三十九年帝国学士院会員となり、

明治四四年史学会評議員長 一九一七年九月死去

武光先生の先の解説を再掲する。：

明治維新をきっかけに政府の指導のもとに、ドイツ流の実証主義史学が文献史学の主流を占めるようになった。中心人物の一人、星野恒は、明治二五年発表の「日本国号考」のなかで、卑弥呼を西国の一酋長としたうえで、邪馬台国を筑後国山門郡においたうえで、邪馬台国は大和朝廷に滅ぼされたというのだ。

●久米邦武(くめくにたけ)・一八三九年生れ

明治二一年東京帝国大教授のちに立教大学教授・早

稲田大学教授・文学博士 一九三二年二月死去

●白鳥庫吉(しらとり くらきち)・一八六五年生れ

東京帝国大学文科大學史学科教授・文学博士

学習院大学教授と兼務で東京帝国大学教授

東京帝国大学名誉教授 一九四二年三月死去

武光先生の先の解説を再掲する。：

明治四三年、邪馬台国大和説を唱えた京都帝国大学教授の内藤虎次郎「卑弥呼考」と、九州説を唱えた東京帝国大学教授の白鳥庫吉の「倭女王卑弥呼考」がほぼ同時に発表された。文化系の学問の活性化が背景にある。

一般的には、京都大学の大和説は内藤虎次郎に始まり、東京大学の九州説は白鳥庫吉に始まる。しかし、先に述べたように、東京大学の星野恒はすでに九州説を唱え、久米邦武も明治四十年の「日本古代史」で星野説を受け継いでいる。

だが、そういった東京大学の学者は「魏志倭人伝」の距離、日数、方向について満足のいく説明を行っていない。史料に忠実に従えば、邪馬台国は九州をつきぬけた南の海上にいつてしまう。それゆえ、「魏志倭人伝」の行程記事に合理的な解釈を加えて、邪馬台国を九州においた白鳥庫吉の説が高く評価される。

●黒板勝美(くろいた かつみ)・一八七四年生れ  
東京帝国大学文科大學部教授・文学博士  
大正八年史料編纂官兼東京帝国大學教授となり、  
東京帝国大學名誉教授 一九四六年一二月死去

武光先生の先の解説を再掲する。…

そのころ官学アカデミズムでは、黒板勝美らの日本古  
文書学が、体系化されていた。黒板勝美らの「国史大系」  
は今も日本史研究の基礎的文献として重んじられている。

●井上光貞(いのうえ みつさだ)・一九一三年生れ  
東京帝国大學・大学院文学部国史学科・文学博士  
昭和四二年、東京大學文学部教授、  
昭和五六年国立歴史民俗博物館初代館長就任  
一九八三年二月死去

武光先生によれば、次のように解説している。…

井上光貞は、かつて白鳥庫吉が主張した不弥国から邪  
馬台国まで千三百里だとする意見を重んじて、邪馬台国

を九州におくべきだという。…そして三世紀の「やまと」  
の地は、筑紫国山門郡と肥後国菊池郡山門郷とを含む広  
い地であった。…邪馬台国はかなりの領地を治めていて  
も、ずば抜けた勢力を持つ専制国家ではないという。卑  
弥呼は、多くの小国の支持なしには王位につけなかった。

●佐藤 信(さとう まこと)・一九五二年生れ

東大大学院人文科学研究科史学博士課程中退・  
東京大学名誉教授

●設楽博巳(したら ひろみ)・一九五六年生れ

筑波大・大学院文学部考古学博士課程終了  
国立民族歴史博物館・駒澤大學教授を経て  
東京大学大学院人文社会科学研究科教授

(以下…大野・追記)

この二人は、武光先生より後年の東大大学院博士課程  
でしかも東大教授だが、ここでの論点については、明確  
な態度表明(論文・著書などで)が見当たらない。

佐藤信教授は、先に掲げた「大学の日本史・古代」の  
編者で第一章の「新しい古代史」を執筆されている。

設楽博巳教授は、日本歴史・私の最新講義「縄文社会  
と弥生社会」(敬文舎)の著者だが、論争点への直接の論  
及は見当たらない。

●武光誠(たけみつ まこと)・一九五〇年生れ  
東大大学院国史学専攻博士課程修了・  
明治学院大名誉教授

武光先生は、他の東大派の先生と同じく文献史学的には、邪馬台国の所在地は九州説に分があるとしている。著書の「邪馬台国と大和朝廷」(平凡社新書)では：

「魏志倭人伝」は、不弥国から南に進めば邪馬台国に着くと記している。この行程記事を素直に読めば、邪馬台国は筑後川流域にくる。邪馬台国九州説に分がある。

そして、邪馬台国九州説にたつ白鳥庫吉(注・東大派)は、不弥国から邪馬台国までの距離を「魏志倭人伝」全体から千三百里程度と導きだした。今までにこの白鳥説に対する邪馬台国大和説(注・京大派)からの有効な反論は出されていない。文献の読みの点だけ論じるなら、邪馬台国はほぼ九州で決まったことになる。

考古学的には、の現在までの発掘成果からみて、三角縁神獸鏡は三世紀半ば(注・二五〇年頃)以降に作られ、広く交易されたありふれた銅鏡であった。この鏡の製作地はこれまで多くの青銅器工房が出た北九州がふさわ

しい。渡来系の工人が来やすいのも北九州であろう。

しかし、三角縁神獸鏡は大和を中心に分布している。奈良県天理市の黒塚古墳の発掘のあと、邪馬台国大和説をとる考古学者の意見が目立つようになった。黒塚古墳から邪馬台国ゆかりの三角縁神獸鏡が出た以上、邪馬台国で古墳が作り始められたことは間違いない。ゆえに、大和に古墳をのこした大和朝廷が邪馬台国であり、卑弥呼は皇室の祖先に連なる女性だというのだ。そのため近年、邪馬台国九州説は大きく後退している。

だが：邪馬台国の時代にあたる三世紀の日本は、魏志倭人伝が語るような(南方系文化圏のなかにあった。邪馬台国の習俗は北方系の文化を受けた大和朝廷とはかなり異なるものであった。邪馬台国が発展して日本を統一したとすれば、南方系祭祀を用いた邪馬台国に指導された日本は南方系文化のなかにとどまっていたろう。大和朝廷が邪馬台国と異質な政権で、大和時代の日本は北方系の騎馬民族文化を受け入れたのである。

近年の大和の考古学上の新発見は、邪馬台国大和説を検証するものであるか。大和朝廷発祥のいきさつが明らかになった点は重要だが、大和の考古学資料はそのまま

邪馬台国の存在に結びつくものではない。考古学資料によつて邪馬台国の全盛期にあたる三世紀の大和に有力な政権があつたことは明らかになつた。

ただ、大和の勢力が北九州を支配していた事實はなく、大和には北九州の文化もみられない。しかも、三世紀半ばの時点で古墳文化は北九州には広まっていない。大和朝廷の支配を受ける前の北九州の勢力が邪馬台国として中国と交渉を持っていたとみる。

古墳の地域別の出現に注目する。北九州では、大和より二、三〇年おくれで古墳が出現する。大和朝廷が北九州を征服したことを物語る。しかも、北九州の発生期の古墳は、九州説で邪馬台国の本拠地とされる筑紫平野には見当たらない。このことは、卑弥呼の後身が三世紀半ばに大和朝廷と対立していた。しかし、筑紫平野もやがて古墳文化にのみ込まれていく。邪馬台国は大和朝廷に征服されたとみるのが最も妥当なのではないか。

(以下…大野・私見)

長々と引用してきたが、東大派の、「邪馬台国九州説」と、「卑弥呼は邪馬台国の盟主だが、天皇家の後裔でない説」の立場にある。

● 倉本一宏（くらもと かずひろ）・一九五八年生れ  
東大大学院人文科学研究科史学博士課程終了  
国際日本文化研究センター教授

(以下…大野・追記) 倉本先生は、ここの第一章の「教科書の古代史」の大学の「日本古代史」の教材・参考書の共同執筆者である。過激なほどの東大派…卑弥呼の邪馬台国は北部九州、邪馬台国連合とヤマト政権は別の政治権力…である。京都学派に意識的に対抗している。第一章に詳しく引用している。

● 大津透（おおつ とおる）・一九六〇年生れ  
東大大学院人文科学研究科史学博士課程中退  
東京大学人文社会系教授

(以下…大野・追記) 大津先生は、第一章の「教科書の古代史」の高校の教科書（山川出版社）の執筆や、社会人向け日本史教科書（山川出版社）の執筆があり、ここでの論点となる邪馬台国の所在地論争は、中立的立場「結論が出ていない」の立場を貫いている。



## 【京都大学・文献史学・考古学の学説】

●内藤寅次郎（ないとう とらじろう）・一八六六年生れ

明治一七年 秋田師範学校卒業、

明治四〇年京都帝国大学文科大學史学科講師  
のち京都帝国大学教授、一九三四年六月死去

武光先生の先の解説を再掲する。：

明治四三年は、邪馬台国研究のうえて画期的な年になった。邪馬台国大和説を唱えた京都帝国大学教授の内藤虎次郎「卑弥呼考」と、九州説を唱えた東京帝国大学教授の白鳥庫吉の「倭女王卑弥呼考」がほぼ同時に発表された。文化系の学問の活性化が背景にある。

内藤虎次郎は、新たな史料解釈で「日本書紀」の神功皇后卑弥呼説以来ほとんど相手にされなかった大和説に目の目を見させたことになる。内藤虎次郎は「魏志倭人伝」の方向の書き方が違っているとみた。：（大和説の）新井白石は説明なしに南を東に変更した。しかし、内藤虎次郎の説は、それを「魏志倭人伝」の誤記とした面であり、より大和説の立場を明らかにしたと評価できる。

●小林行雄（こばやし ゆきお）・一九一一年生れ

神戸大・工学部卒、京大文学部助教・教授  
京大名誉教授 一九八九年二月死去

武光先生によれば、次のように解説している。：

昭和二十年代後半から文献史学以外の分野の学者による邪馬台国論が発表されるようになった。考古学者の小林行雄（注・京都大学）の同範鏡理論は、その代表的なものである。彼の出現によって邪馬台国研究の流れが大きく変わり、考古資料と文献とを併せみて、邪馬台国の位置を考える今日的な邪馬台国研究が確立したといえる。

小林行雄は昭和二十七年の「邪馬台国の所在論」に始まる一連の論文で次のように主張した。「魏志倭人伝」は、魏が景初三年に百面の鏡を卑弥呼に授けたと記している。その鏡の多くは三角縁神獸鏡ではなかったろうか。しかも、邪馬台国は正始四年の朝貢や台与の朝貢のときにも三角縁神獸鏡を与えられたとみる。そこで、日本にもたらされた三角縁神獸鏡は、数百面に及ぶであろう。

邪馬台国は自国に従う地方の豪族に、中国の三角縁神

獸鏡を分け与えたのだろう。(三角縁神獸鏡が三十二面出てきた) 樺井大塚山古墳の主は鏡の下賜にかかわった有力者であった。ゆえに、邪馬台国は樺井大塚山古墳に近い大和にあった大和朝廷にちがいない。

(以下：大野・私見)

この小林行雄の説は、その後批判も多く出てきている。鏡が出土した古墳の作られた時代と卑弥呼が鏡を中国から受けた時代とに、百年近い差があること、出土数の多さから日本国産の三角縁神獸鏡の説も出たこと、古墳へのこの鏡の埋葬の仕方から、貴重品扱いされていないことなど指摘されている。

●直木孝次郎(な おき こうじろう)・一九一九年生れ

京都帝国大学文学部史学科卒・京大文学博士

大阪市立大学教授・名誉教授・岡山大学教授

二〇一九年二月死去

●上田昭正(う えだ あきまさ)・一九二七年生れ

京大・文学部史学科卒、京大教養学部教授、

京大名誉教授 二〇一六年三月死去

上田先生の著書「大和朝廷：古代王権の成立」(講談社学術文庫)では、次のように解説している。…

はしがき：ヤマト(大和)朝廷の起源は、多くの謎におおわれている。三世紀の邪馬台国が、いったいどこにあったのか。その所在についての議論や、邪馬台国がその後の倭王権とどのような関係にあるのか、その権力の発端についても未解決の問題が横たわっている。

謎の世紀とよばれている四世紀の倭王権の実態は、まだ十分に解明されていないのである。そのため三世紀の邪馬台国と五世紀の倭の五王の段階との間におけるすじみちはなおはっきりと見定めがたい状況にある。

ヤマト朝廷の成立についても統一ある見解はまだ示されていない。…前方後円墳の出現に象徴される古墳文化の歩みと王権の構造とは、どのようなつながりをもつか。そこにはいくつもの課題が残されている。

二世紀後半ごろの事件として「魏志倭人伝」は、…其の国本亦(もとまた)男子をもって王となし、住(とど)まること、七、八十年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年。乃(すなわ)ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼という。…この二世紀後半の内乱によって、もとも

と男王であった国（邪馬台国）がそれをやめて、女王卑弥呼が共立されることになったと述べる。魏志に記す北九州の伊都国などに「世々王有るも、皆女王国に統属す」とあるようなクニグニの王が、特定の宗主国とも言うべき国の元に新たに統属される政治的社会的の成立があった。：邪馬台国国王（卑弥呼）の共立も、じつはこの乱を契機とするものであり、王権の質もかなりの差が生じたと考えられる。女治の背後に、女王をとりまく軍事力と、魏との通交による外的権威があった。

卑弥呼が死んで「更に男王を立てしも、国中服さず」、また戦いがおこった。：。ついに卑弥呼の一族の娘で年十三になつていた台与が女王に迎えられた。台与も魏に朝貢し、魏の後の晋にも朝貢した。邪馬台国は最初から女王の国ではなく、台与以降は再び男王になつていたとみなされる。台与の死後について唐の史書には「其の後、また男王を立てて、並びに中国の爵命を受く」と記述されている。おそらく三世紀末ないし四世紀初めのころが相当する。邪馬台国は男王によつて王権が受け継がれるのが原則であつたと考えられる。卑弥呼↓台与↓畿内倭王権のコースではなく、台与と畿内倭王権の間に男王が介在したことを注目すべきである。男王権が動揺した二世紀後半や三世紀後半の時期に、女王の卑弥呼・台与が

擁立されて、その危機のりきろうとしたのである。

邪馬台国九州説にとつての弱点の一つと思われるのは、倭人の国三十国の中で最大規模で描く邪馬台国が、九州においてその後の歩みを絶つことである。三世紀後半の遺跡・遺物において、古墳文化につながりをもつものが近畿の地域に見いだされるのに、四、五世紀の九州にあつたとする邪馬台国の後裔を見いだせない。

九州説の人々は卑弥呼の後の台与の段階で、何らかの政治的変動によつて滅亡したとか、東遷して畿内政権につながつたとか、主張する。中国の史書「梁書」にうかがえるように、台与で邪馬台国は滅んだのでなく、東遷したのでなく、台与の死後、また男王が王位について中国の爵命を受けていたと伝える。三世紀段階の邪馬台国を畿内に求め、次の畿内倭王権とのつながりを考えるほうが、邪馬台国の発展過程にはより説得力がある。

（以下：大野・私見）

邪馬台国・卑弥呼と大和王権・大王つながりを男王の存在で語るが、「なるほど」とは思わせてくれない。京大学派の上田先生は、後で解説する、明治大学の大家先生と、戦後まもなくの、日本考古学会の重鎮であつた。

●佐原 真(さはら まこと)・一九三三年生れ

京大・大学院文学研究科考古学専攻博士課程修了

国立歴史民俗博物館館長・二〇〇二年七月死去

※「国立歴史民俗博物館」の項で学説を掲載

●都出比呂志(つで ひろし)・一九四二年生れ

京大・大学院文学研究科考古学専攻博士課程中退

大阪大学名誉教授

都出先生の著書「古代国家はいつ成立したか」(岩波新書)では、次のように解説している。…

「魏志倭人伝」と邪馬台国：弥生時代後期には、地方権力は北部九州、吉備、出雲、畿内、東海、関東と、それぞれが独立していました。その地方権力が、権力争いを始めて収拾がつかなくなつたため、地方権力は卑弥呼を王に擁立して戦いを収めたのです。こうして日本で初めての中央集権、邪馬台国が西日本に成立します。二世紀末のことです。その後、卑弥呼が没し、王のための巨大な墓、古墳が作られます。その後権力者は引き続き古墳を築くようになります。

弥生時代は採集経済の縄文時代の後に続く生産経済の時代で、紀元前一〇〇〇年から紀元後二四〇年までの約一二〇〇年間続き、早期、前期、中期、後期、終末期に区分されています。中期が、小さな政治的まとまり、「魏志倭人伝」にいう「国」が生まれ、さらに大きな政治的ブロックが出現する時代で、紀元前四〇〇年～紀元前五〇〇年、後期はブロック間の争いが続く時代で、紀元前五〇〇年～紀元後一八〇年、終末期は卑弥呼が王として君臨した時代で、紀元後一八〇年～紀元後二五〇年です。

鉄の供給ルートをめぐる覇権争い：鉄の普及は、一世紀末まで「ツクシ政権」と言われるほど力を持つ北部九州が最も進んでいました。この政権が後漢王朝の庇護を受けており、鉄を生産する朝鮮半島の楽浪郡がその支配下にあった。二世紀後半に後漢王朝が弱体化し、この好機に「ヤマト政権」が「ツクシ政権」を制圧し鉄の供給ルートを掌握した、というのです。

二世紀末には畿内を含めた日本列島に鉄器が本格的に普及しましたが、このころ畿内は力を増し、北部九州をはじめ西日本全体に大きな影響力を持つようになっていきました。全国に鉄が急速に普及したのは、鉄が畿内を通して日本に多量に流入したからと推定できるのです。

卑弥呼の墓：邪馬台国の王、卑弥呼が没したとき、残された権力集団は巨大な墓、前方後円墳を築きました。この大和の地には、弥生時代から続く伝統的な墓形、前方後円墳原形がありましたから、卑弥呼の墓が前方後円墳になるのは当然の成り行きでした。支配者集団は巨大な古墳を築いて自分たちの力を誇示し、権力の維持を図る必要があったのです。奈良のこの地に古墳が出現する五〇年位前からこの大和の地に漢の鏡や鉄の出土数が次第に増加しており、古墳出現期に多くの巨大古墳が築かれた奈良地方に、絶大な力をもって日本列島のほぼ全域を支配する大和政権が生まれたと推定できます。

(以下：大野・私見)

紀元前・後の年代と歴史的出来事のわかりやすい。ただ、邪馬台国所在地が、大和説が大前提となっている。

●吉川真司(よしかわ しんじ)・一九六〇年生れ

京大・大学院文学研究科考古学専攻博士課程終了  
京大・大学院文学研究科教授

※現在の京大の現役教授、「律令官僚制研究」が評価されており、論争点の邪馬台国時代より後の平安京の時代が研究対象になっている。

●安本美典(やすもと びてん)・一九三四年生れ  
京大・大学院文学研究科心理学専攻・文学博士  
産能大教授・「邪馬台国の会」主宰。

(以下：大野・私見) 安本先生は、著書の「データサイエンスが解く邪馬台国―北部九州説はゆるがない―」で九州説を唱えている。

安本先生は、京都学派に与していない。また、ご自身の著書で、九州説を主張する研究機関の専門家や大学の先生からの引用を多くされているが、本家ともいえる(北九州を主張する)東大派の学説は一切引用されておらず、片手落ちの感がする。

さらに炭素一四年代法による年代の科学的アプローチについても支持していない。さきの著書で「前方後円墳の時期は、…西暦三五〇年前後とみられる。前方後円墳のはじまりの年代を、卑弥呼の西暦二五〇年頃まで遡る見解がある(注・歴博の炭素一四年代法：詳細は後述)。このような見解は「思考実験」といえる」とし、誤差の幅の広い測定値として否定的である。

一方で、「鉛同位体比の測定値研究」(注・科学的アプローチ)を遺跡から出土する鏡の製作年代を推定する方法として肯定している。自己矛盾な感じた。

【大阪大学・九州大学の学説】

■大阪大学

●西本昌弘(にしもと まさひろ)・一九五五年生れ  
大阪大・大学院文学史学専攻博士課程終了  
関西大学・文学部教授

西本先生の論説「歴史道―卑弥呼の正体・邪馬台国はどこにあったのか―」(週刊朝日ムック18)では、次のように解説している。……

●福永伸哉(ふくなが しんや)・一九五九年生れ  
大阪大・大学院文学研究科博士課程中退  
大阪大・大学院文学研究科教授

福永先生の著書「邪馬台国から大和政権へ―大阪大学新世紀セミナー―」(大阪大学出版会)では、次のように解説している。……

●松木武彦(まつき たけひこ)・一九六一年生れ

大阪大・大学院文学研究科博士課程終了  
岡山大文学部教授を経て国立歴史民俗博物館教授  
総合研究大学院教授兼任

※「国立歴史民俗博物館」の項で学説を掲載

■九州大学

●鏡山 猛（かがみやま たけし）・一九〇八年生れ

九州帝国大学法学部史学科卒。兵役を経て

九州大学文学部考古学講座初代教授、のち名誉教授、

九州歴史資料館の館長就任 一九八四年一〇月死去

●西谷 正（にしたに ただし）一九三八年生れ

京都大学大学院文学研究科修士課程修了。

奈良国立文化財研究所研究員、福岡県教育委員会、

九州大学文学部教授・名誉教授。考古学協会会長

武光先生の先の解説を再掲する。：

●春成 秀爾（はるなり ひでじ）一九四二年生れ

岡山大学法学部史学科日本史専攻卒業

九州大学大学院文学研究科考古学専攻修士課程中退

国立歴史民俗博物館 総合研究大学院大学名誉教授

※「国立歴史民俗博物館」の項で学説を掲載

●藤尾 慎一郎（ふじおしんいちろう）一九五九年生れ

広島大学文学部史学科考古学専攻卒、九州大学

大学院文学研究科考古学専攻博士課程単位取得退学、

国立歴史民俗博物館及び総合研究大学院大学教授

※「国立歴史民俗博物館」の項で学説を掲載

●辻田 淳一郎（つじたじゅんいちろう）一九七三年生

九州大学文学部考古学専攻卒業、

同大学院比較社会文化研究科博士後期課程終了

九州大学人文科学研究科専任講師を経て准教授

## 【早稲田学・文献史学・考古学の学説】

●津田左右吉(つだ そうきち)・一八七三年生れ

東京専門学校邦語政治科?現在の早大政経学部卒  
東京専門学校卒業後、白鳥庫吉の指導を受けた  
早稲田大学法学部文教授。一九六一年一二月死去

武光先生の先の解説を再掲する。…

津田左右吉は、大正二年に「神代史の新しい研究」を発表し「古事記」や「日本書紀」の記事の多くは、後世の朝廷で創作されたものであると指摘した。そして大正八年には「古事記及び日本書紀の新研究」を出してそれぞれの史料批判を推し進めた。津田の説に従えば、卑弥呼に関わる事件や人物を「古事記」、「日本書紀」の古い時代の記述に結びつけてきた邪馬台国大和説は、よりどころを失う。

津田左右吉は「神代史の新しい研究」で邪馬台国九州説をとつたといわれる。「魏志倭人伝」の時代には九州地方には小君主が多くおり、そのうち「皇室が筑紫から移って新たに都を奠(さだ)めた」と記しているからであ

る。津田左右吉は戦後の「邪馬台国の位置について」の論文のなかで、…卑弥呼の時代に当たる崇神朝、垂仁朝に女王がみられないことは、大和説の弱点であると述べる。そこから、かれは邪馬台国は筑後国山門郡にするのがよいと説く。九州説としては妥当なものである。

●片岡宏二(かたおか こうじ)・一九五六年生れ

早稲田大・大学院考古学専攻博士課程修了  
小郡市埋蔵文化財調査センター所長

片岡先生の論説「歴史道―邪馬台国は北部九州のクニグニの集合体だ―」(週刊朝日ムック一八)では、次のように解説している。…



●仁藤敦史(にとう あつし)・一九六〇年生れ

早稲田大・大学院日本史学専攻博士課程修了

国立歴史民俗博物館教授・総合研究大学院教授兼任

※「国立歴史民俗博物館」の項で学説を掲載

●川尻秋生(かわじり あきお)・一九六一年生れ

早稲田大・大学院日本史学専攻修士課程修了

千葉県立博物館を経て早大文学学術院教授

※現在の早稲田大学教授、ここでの論争点の邪馬台国時代より後の平安時代が研究対象(大野)。

●渡邊義浩(わたなべ よしひろ)・一九六二年生れ

筑波大・大学院歴史・人類学研究科博士課程終了

早稲田大学文学学術院教授

渡邊先生の著書「魏志倭人伝の謎を解く―三国志から見る邪馬台国」(中公新書)では、次のように解説している。：

【明治大学・文献史学・考古学の学説】

●大塚初重(おおつか はつしげ)・一九二六年生れ

明治大・大学院文学研究科考古学博士課程終了

明治大学教授・日本考古学協会会長など歴任

二〇二二年四月死去

大塚先生の著書「邪馬台国をとらえなおす」(講談社現代新書)では、次のように解説している。：

「日本国家の起源に迫る」…中国の正史の魏志倭人伝に記された邪馬台国の記述はわずか二千字足らずなのだが、その文献的解釈はさまざまで、邪馬台国の場所を確定するような説はまだない。…しかし魏志倭人伝に記された景初三年(西暦二三九年)から正始八年(同二四七年)の倭国と魏王朝の交流の記録が真実であるとすれば、女王卑弥呼の死を含む邪馬台国の記事は古代日本の二世紀後半から約百年にわたる歴史事実である。邪馬台国はどこにあったのか、邪馬台国と日本の最初の王権とされる大和王権とはどのような関係にあるのか。邪馬台国問題は日本の起源に迫る避けて通れない重要な鍵である。

●吉村武彦(よしむら たけひこ)・一九四五年生れ  
東大大学院人文科学研究科国史学博士課程中退  
千葉大教授を経て明治大学教授のち名誉教授

吉村先生は、東京大学で博士号取得だが、東大派の邪馬台国九州説をとっていない。考古学でなく文献史学からの学説。明治大学の教授時代に近畿説をとるようになったと思われる。岩波新書のシリーズ『日本古代史②』「ヤマト王権」から引用する。

「邪馬台国の読み」で：古い時代には「上代特殊仮名遣い」があり、邪馬台国の四字のうち「台」との発音には甲類と乙類があり、「台」は乙類で「やまと」と読む。邪馬台国は現代音で「やまとこく」が本来の読み方であろう。：近畿地方の「大和」は乙類の「と」、九州の旧筑後国山門郡は甲類の「と」となる。音節で言えば邪馬台国は近畿説(大和)が有利となる。

「魏と邪馬台国」で：邪馬台国の所在地をめぐるのは白鳥庫吉の東京系学者の九州説と、内藤湖南(虎次郎)ら京都系学者の近畿説とがあり：この所在地が確定しないとその後に続くヤマト王権の正しい理解が出来ない。

当時の中国は、魏・呉・蜀が相対立して抗争する三国

時代であった。：魏の国にとって邪馬台国は敵対する呉の国の東方海上に存在する国と理解されていた。：戦略的にも重要な国と理解されていた。：魏の地理感覚は、日本列島を、九州を北とし、そこから南方に伸びる列島とされていた。この認識からすれば、邪馬台国は九州ではなく、近畿地方の方が矛盾しないと思われる。

「倭国の統合化と邪馬台国」では：倭国統合化のプロセスを考察する文字資料はないので考古学の成果から推測することにした。その素材のひとつが、出土資料の漢鏡である。漢鏡は当初は九州から近畿地方に比較的均等に分布していた。二世紀半ば以降になると四国東部から近畿に集中するようになる。つまり朝鮮半島から各国へ流通していた鏡が、直接近畿地方にもたらされ、そこから各国に分配されるようになる。漢鏡は、各地域の首長権を象徴するレガリア(王位を象徴する宝器)である。：二世紀後半になると漢鏡分布の主体が近畿地方に変わり、列島ではこの地域の方が九州よりも政治的に優位になることがみてとれる。

日本列島が倭国として統合されていくプロセスとしては、一世紀末(注・西暦九〇年頃)の段階では九州が進んでいたが、二世紀後半(注・同一五〇年頃)になると

近畿地方が優位にたった。こうしたなかで、卑弥呼が存在した三世紀初頭（注・同一〇〇年頃）には邪馬台国が倭国の盟主となっていたのである。漢鏡の分布などこうした考古学的研究成果を積み重ねていくと、邪馬台国の所在地は近畿地方となってくる。

「ヤマト王権のはじまり」で：邪馬台国を盟主とする倭国が三世紀の列島を政治的に統合し、魏と外交関係を維持していた。この三世紀の倭国とヤマト王権の関係は、ヤマト王権がいつ成立していたかによる。成立の時期と最初の王が問題になる。

初代のヤマト王権の王は崇神天皇である。また、実在した可能性がある天皇としても崇神があげられてきた。

この崇神が実際に王位に就き、実在したことを証明する史料はない。「古事記」によれば崇神の没年干支は「戊寅年」で西暦二五八とされる。しかし、これが正確な紀年である保証はない。：考古学的史料、つまり、崇神天皇陵から推測する。今日、宮内庁からは崇神陵古墳として、奈良盆地南部の柳本古墳群の行燈山古墳が比定されている。築造年代は四世紀前半（注・同三〇〇〜三五〇年）といわれる。このことから、ヤマト王権は四世紀前半頃には成立していたことになる。

「ヤマト王権と邪馬台国・卑弥呼」で：ヤマト王権の誕生は四世紀前半と想定されるので、三世紀半ばの邪馬台国とヤマト王権との直接的関係はないことになる。

しかし、「日本書紀」の編者は、「魏志倭人伝」の記事を読んでおり、卑弥呼のことは知っていた。日本書紀では、卑弥呼は神功皇后にあててている。魏志倭人伝にみられる邪馬台国の時期を神功紀に比定したのである。

：「日本書紀」の古い時期の天皇は男性であり女性はいない。そのため卑弥呼を神功皇后に比定せざるを得なかった。：ヤマト王権にまつわる伝承に卑弥呼が含まれていなかったから、と考えるのが妥当であろう。

ところで、考古学では卑弥呼の墓を最古級の前方後円墳である箸墓古墳にあてる説も少なくない。この説を前提にすると、前方後円墳の形成によってヤマト王権の成立を考える立場をとれば、ヤマト王権の初代の王は卑弥呼となる。ところが、ヤマト王権の初代の王が女性という伝承はまったくなく、こうしたヤマト王権の歴史は受け入れることができない。

(以下…大野・私見)

吉村先生の「ヤマト王権」からの引用が長くなつてしまつた。邪馬台国の所在地論争は、吉村先生の専門の文献史的には、「魏志倭人伝」の、邪馬台国までの行程を連続して読む連続説が…文章の読み方としてはこの連続説の方がいい…として近畿説をとつている。また古い中国の地理認識からも近畿説が矛盾しない…としている。

考古学的には「漢鏡」の分布の九州から近畿への移動を根拠に、近畿説を主張している。

ここで私が問題にしたいのは、吉村先生は「ヤマト王権」と近畿説「邪馬台国」の関係について、…「直接的関係はない」、「ヤマト王権にまつわる伝承に卑弥呼が含まれていなかった」…と述べていることだ。同じ近畿大和にあつた政治権力の邪馬台国・卑弥呼(二五〇年頃)と、ヤマト王権・崇神天皇(三二〇年頃)が関係ないとは思えない。卑弥呼と次の台与の時代、その次の大王(男王らしい)と、崇神天皇の時代にますます接近してくる。さらに、卑弥呼を共立した組織(のちの豪族「氏族」)の存在と時系列的趨勢、崇神天皇の時代の組織との関係など考えると、「関係ない」という言い切りは、専門外の私にはとても「ストレス=納得できない」になる。

邪馬台国所在地論争に直接関しないが、日本書紀の「国作りの神話」について、…「神話から歴史へ」ではなく、「歴史が生んだ国作り神話」である…と述べている。…いにしへの人の構想力で作られた建国神話であることはまちがいない。現実の歴史のなかからこうした国づくり神話が記述された…としている。神話の世界と現実の歴史の世界の関係を表していて意味深い。

●滝音能之(たきおとよしゆき)・一九五三年生れ

早稲田大学・日本史学科卒(早大の文学博士)

明治大学大学院日本史学博士課程満期退学

島根県古代文化センター、駒澤大学文学部教授

滝音先生の論説「日本の古代豪族―発掘・研究最前線―」(宝島ムック一八)では、次のように解説している。

：

●石川日出志(いしかわ ひでし)・一九五四年生れ  
明治大・大学院文学研究科考古学博士課程中退  
明治大学文学部史学科教授

石川先生の著書「農耕社会の成立―シリーズ日本の古代史①」(岩波新書)では、次のように解説している。：

●河内春人(こうち はるひと)・一九七〇年生れ  
明治大・大学院文学研究科史学博士課程中退  
関東学院大経済学部教授

【その他の大学・文献史学・考古学の学説】

●鳥越憲三郎（とりこしけんざぶろう）一九一四年生れ  
関西学院大学文学部卒・東京教育大学文学博士  
大阪教育大学教授、大阪経済法科大学教授歴任  
二〇〇七年三月死去

鳥越先生の著書「神々と天皇の間―大和朝廷成立の前夜」（朝日新聞社）では、次のように解説している。…

●寺澤 薫(てらさわ かおる)・一九五〇年生れ

同志社大学・大学院文学研究科考古学博士課程中退  
奈良県立橿原考古学研究所・総務企画部長を経て、  
桜井纏向学研究所センター所長

※「奈良県立橿原考古学研究所」の項で学説を掲載

●石野博信(いしの ひろのぶ)・一九三三年生れ

関西大学・大学院文学研究科終了

奈良県立橿原考古学研究所を経て、徳島文理大学教授

兵庫県立考古博物館名誉館長

※「奈良県立橿原考古学研究所」の項で学説を掲載

●水谷千秋(みずたに ちあき)・一九六二年生れ

龍谷大学・大学院文学研究科博士課程終了

堺女子短期大学教授・副学長

水谷先生の著書「日本の古代豪族一〇〇」(講談社現代

新書)では、次のように解説している。…